

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03259

研究課題名(和文) アジア主義と大正デモクラシー：新人会・無産政党のアジア観を中心に

研究課題名(英文) Asianism and Taisho Democracy

研究代表者

中島 岳志 (NAKAJIMA, Takeshi)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：40447040

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代前半は大正デモクラシーが拡大した時期とされる。しかし、その数年後の30年代には超国家主義が拡大したとされる。この急激な変化の間にあるものは何か。本研究では、大正デモクラシーと超国家主義・アジア主義の連続性に注目し、その特質を追究した。特に新人会・無産政党メンバーの思想と行動に着目し、彼らの構想に内在する超国家主義・アジア主義の論理を抽出した。成果の一部は『超国家主義 - 煩悶する青年とナショナリズム』(2018年、筑摩書房)として出版した。

研究成果の概要(英文)：In the early 1920s Taisho democracy expanded. However, in the 1930s ultra-nationalism expanded. What is this sudden change? In this research, we focused on the continuity of Taisho democracy and ultra nationalism, Asianism. Especially focusing on thoughts and actions of members of the Sinjinkai and Musanseito, I revealed their ideas. Some of the achievements were published as "Ultra nationalism" (Chikuma Shobo).

研究分野：政治学

キーワード：大正デモクラシー アジア主義 超国家主義

1. 研究開始当初の背景

近代日本とアジアの関係が問われる今日、アジア主義の全体像を明示することは、喫緊の課題である。

アジア主義研究はこれまで、主要な思想・運動の担い手である頭山満、内田良平、宮崎滔天、北一輝、大川周明など右派・国家主義者たちを思想史研究の手法で分析することが主流だった。彼らについての伝記的研究は、着実に成果が積み重ねられている。

一方、近年のアジア主義研究では、日本のアジア主義者とアジア諸国のナショナリストの国際的ネットワーク・移動・交流の分析が増えている。近代アジアを政治的・思想的コンタクト・ゾーンとして捉え、構想の連鎖、呼応、齟齬などが追究される。山室信一は「基軸」・「連鎖」・「投企」をキーワードに、人の移動や植民地化のプロセスを追い、思想空間としての近代アジアを立体的に描いた(『思想課題としてのアジア』岩波書店、2001年)。月脚達彦は一連の朝鮮開化派研究(『朝鮮開化思想とナショナリズム 近代朝鮮の形成』東京大学出版会、2009年など)を通じて、朝鮮社会の近代化を目指す金玉均らと日本人思想家の呼応関係を明らかにした。ジャミール・アイディンはイスラーム世界と日本のアジア主義者の関係を論じ、彼らが「オルタナティブ・モダニティ」を追究した過程を明らかにした(Cemil Aydin *The Politics of Anti-Westernism in Asia: Visions of World Order in Pan-Islamic and Pan-Asian Thought*, Columbia Univ Pr, 2007)。他にも孫文をはじめとする中国革命家の関係やファン・ボイ・チャウなどのヴェトナム・ナショナリストとの交流、フィリピン独立運動家と孫文の連帯など、先行研究は多岐に及んでいる。

代表者(中島岳志)はこれまで、『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』(白水社、2005年)において、頭山満、大川周明らアジア主義者とインド独立運動の相互関係・思想連関・ネットワークを明らかにした。その研究成果によって、2005年度の大仏次郎論壇賞・アジア太平洋賞大賞を受賞した。また、ラビンドラナード・タゴールと日本の関係に迫った研究(「アジアの脱植民地化と帝国日本」苅部直編『岩波講座・日本の思想・第3巻 - 内と外』岩波書店、2014年)やラージャー・マーヘンドラ・プラタープ研究(「R・M・プラタープと近代日本のアジア主義 - 反植民地ネットワーク・世界連邦・日本帝国主義」『国際政治』146号、2006年)、ラーダービノード・パール研究(『パール判事 東京裁判批判と絶対平和主義』白水社、2007年)などを発表して来た。史料面では、大川周明が頭山満を論じた未公開原稿を発掘し、大川周明『頭山満と近代日本』(春風社、2007年)として公開した。R・B・ボースの遺族の聞き取りをまとめた樋口

哲子『父ボース』(白水社、2008年)の編集も行った。

アジア主義者の多くは日本における国家改造運動の担い手となり、テロ・クーデターに関与した。昭和維新運動に関する研究成果として『朝日平吾の鬱屈』(筑摩書房、2009年)、『血盟団事件』(文藝春秋、2013年)、『下中彌三郎』(平凡社、近刊)などを出版してきた。

さらにアジア主義の全体像を示すために『アジア主義 その先の近代へ』(潮出版、2014年)を発表した。ここでは、有力なアジア主義者とアジア諸国のナショナリストの交流を論じると共に、従来アジア主義研究の枠組みで議論されてこなかった南方熊楠、柳宗悦、鈴木大拙、西田幾多郎などのアジア論を考究することで、「思想的アジア主義」の思想系譜を構成した。

しかし、研究を進めるうちに、日本のアジア主義の担い手は右派や宗教思想家にとどまらず、左派活動家・革新勢力に及んでいることに気付いた。先行研究では、左派のアジア主義については断片的な研究は存在するものの、質量ともに不十分である。代表者もこれまで部分的には論じて来たが、右派思想家を研究の中心に据えてきたため、左派運動家・思想家のアジア論については等閑視して来た。特に大正デモクラシー期に革新勢力に参入した青年たちが、1920年代半ば以降、無産政党を牽引しアジア主義的主張を展開するが、彼らの思想についての研究が不足していた。本研究はこれまでのアジア主義研究における欠落を埋めることで、アジア主義の全体像を明示することを目指す。

2. 研究の目的

従来の超国家主義・アジア主義研究は、頭山満・北一輝・大川周明といった右派ナショナリストの思想を対象とすることで、左派革新主義者の超国家主義・アジア主義を等閑視して来た。しかし、翼賛体制期の大東亜共栄圏の議論において、無産政党出身者の果たした役割は大きい。中でも宮崎滔天を父に持つ宮崎龍介は積極的な南進論を展開し、国家有機体論の観点からナチスを礼賛した。宮崎は中野正剛の東方会に所属し、ファシズムへと傾斜した。本研究は、超国家主義・アジア主義の系譜の中に「革新派」が果たした役割を位置付け、その思想と行動を詳述することで、その全体像を明示することを目的とする。

3. 研究の方法

宮崎龍介や中野正剛、赤松克磨、麻生久、島中雄三、西尾末広、浅沼稻次郎らの資料収集を行い、その分析を進めた。

宮崎の生涯は 誕生から一高時代まで、新人会時代、 社会民衆党 全国民衆党 全国大衆党 全国労農大衆党 社会大衆党と続く無産政党時代、 日中戦争以降の東方会での活動時代、 戦後の平和運動時代の5つの時期に区分することが出来る。

については宮崎滔天関係資料の収集を行った。滔天の実家で龍介が幼少期を過ごした熊本での調査を進め、荒尾市宮崎兄弟資料館での史料収集を進めた。 については、新人会の機関誌『デモクラシー』や麻生久を中心に創刊された『解放』などで論考を発表している。龍介・白蓮の遺族のもとには、未調査・未発表の資料が多く存在するため、宮崎家の資料閲覧を行った。 については、各地の資料館・図書館での調査を行った。特に法政大学大原社会問題研究所での史料調査を行った。 については、東方会を主催した中野正剛に関する資料収集を行った。中野の遺族のもとを訪問し、残された資料の確認と収集を行った。 については、原水爆禁止運動をはじめとする平和運動の研究を進めた。荒尾市宮崎兄弟資料館には「宮崎世民史料」が保管されている。世民の父・宮崎民蔵は龍介の父・宮崎滔天の兄であり、二人は従兄弟関係にある。世民は戦後に日中友好協会の設立に尽力したことで知られ、宮崎兄弟資料館に寄託された史料には、訪中の際の手記やメモ、写真などが多く含まれていた。また当館には「宮崎世龍関係資料」も保存されており、収集した資料を分析することで、戦前期無産政党関係者の戦後的展開が明らかになった。

4. 研究成果

宮崎龍介は新人会メンバーとして大正デモクラシーの一端を担い、のちに政治家を目指して無産政党から立候補した。彼は中国通として活躍し、1928年に出版した『対支外交論』では、日本政府を厳しく批判した。龍介の見るところ、日本の支配階級は「支那民衆を苦しめ、支那の国家統一をさまたげ、支那の自主的要求をこぼんで来た」。これは日本が「帝国主義の野獣となり高利貸となつてゐるから」である。「日本国民は不平等条約の撤廃はおろか、即時に満州の問題をも解決して、支那四億の民衆と共に、全世界被圧迫民衆の解放と帝国主義資本主義の野獣と高利貸との征伐に猛進しなければならぬ。」

このような主張は中国で好意的に受け止められ、1929年には孫文の「奉安大典」(国葬)に国賓として招待された。1931年には再び国賓として中国を訪問している。

この中国との信頼関係に注目したのが近衛文麿だった。彼は1930年代半ばに満州問題を解決しようと中国公使と意見交換を重ねた。その時の参事官は一高時代の同級生・丁紹伋で、彼がいつも通訳を務めた。丁は今後の日中和解の連絡役として、龍介を指名し

た。近衛は龍介を「支那の台所から入っている人物」と認識し、その名を記憶した。首相となり、日中戦争が勃発すると、近衛は龍介のことを思い出し、和平交渉のための密使として中国に派遣することを企画した(近衛文麿「平和への努力」『昭和戦争文学全集・別巻』集英社、1965年)。

龍介は命を受けて東京を発ち、神戸から船に乗り込んだ。しかし、和平に反対の陸軍中枢部が動きを察知し、出港前に身柄を拘束された。

この後、龍介は中野正剛の東方会に入り、ブロック経済の確立を訴えた。彼は「国家民族の生命の躍動」を訴え、ヒトラーのナチスドイツを礼賛。「ドイツ民族の生命力」を模範として、神人合一の民族共同体をつくり上げよと絶叫した。「吾々はかくも素晴らしく日本の国家をば、かくも見事に大和民族の姿をば、最高の芸術品として造り上げたいと念願してゐるのであります。而もその前にひれ伏して礼拝合掌し、歡喜讃仰するの日に廻り合ひたいと思つてゐるのであります。かくなりましたならば、アジア十億の民は、日本に帰一し、八紘は即ち日本の本願の如く一宇となるであります」(『世界新秩序の創造と我が新体制』大有社、1940年)。

さらに「大東亜戦争」勃発直前には、アメリカ・イギリスとの戦争を挙行し、果敢に南進すべきことを訴えた(『決戦体制下・国民に檄す』座談会『文藝春秋』1941年12月号)。

しかし、日本は戦争に敗北。すると今度は憲法9条を絶賛し、日本社会党の結成に関与した。その後は原水爆禁止運動に奔走し、滔天の息子として新生中国との友好関係構築にも尽力した。

宮崎龍介の生涯は、無産政党関係者の変遷を代表している。大正デモクラシー期には普通選挙を求めるデモクラットとして活躍するものの、1930年代に入ると国体論に基づく超国家主義へと傾斜し、ファシズムへと接近。戦後は憲法9条を擁護する絶対平和主義者として活動を展開した。この「変遷」は一見すると多くの矛盾をはらみ、思想の一貫性を欠いているように見える。右派/左派という枠組みを前提とすると、時代に沿って「思想的転向」を繰り返しているように見える。

しかし、この思想には一貫した揺るぎない理想が流れている。それは人類統一への欲望であり、純粋な世界の実現だった。ユートピアの楽土の追求は貫徹されている。世界がクライマックスに到達し、人類が苦悩から解放されることを確信している。その具体的な姿は、時代の中で次々に変化したが、希求する理想は一貫していた。

このような革新派のイデオロギーが、1930年代から40年代前半にかけて超国家主義・アジア主義拡大に与えた影響は大きい。本研究では、超国家主義・アジア主義の系譜の中に「革新派」が果たした役割を位置付けることで、その実態を立体的に明示した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計6件)

中島岳志『超国家主義 - 煩悶する青年とナショナリズム』2018年、筑摩書房、全272頁

中島岳志『保守と大東亜戦争』2018年、集英社、全269頁

中島岳志『保守と立憲』2018年、スタンダードブックス、全269頁

中島岳志『親鸞と日本主義』2017年、新潮社、全297頁

中島岳志編『リーディングス戦後日本の思想水脈 7 - 現代への反逆としての保守』2017年、岩波書店、全289頁

中島岳志・島藺進『愛国と信仰の構造』2016年、集英社、全269頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島岳志 (NAKAJIMA Takeshi)
東京工業大学リベラルアーツ研究教育
院・教授
研究者番号：40447040

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()